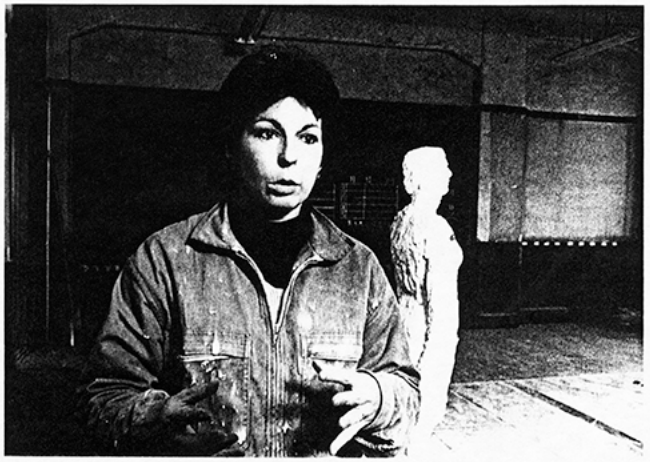
ASAKUSAE Orientation 50°Nord

浅草にはじけたベルギーの感性 『日本ベルギー現代美術交流』展を追う

『日本ベルギー現代美術交流』展のために、11人のベルギーの作家が来日した。彼らは日本側の作家とともに、浅草の旧金竜小学校で制作し，校舎のあちこちに置かれた作品は、4月7日から20日まで公開された。近くのワンルーム・マンションに寝泊まりし、ことばのハンディと闘いながら、新しい空間での自己表現に挑むことで、作家たちは何を見いだしたのだろうか。制作中の作家を訪ね、話を聞いた。



ベルギー側のまとめ役、テレーズ・ショットーさん。「アーティストどうしが交流できたことに満足しています。」

アトリエ4月号ですでに紹介したように、この交流展の企画は、日本とベルギーのアーティストたちが、実行委員会の協力を得て、両国での作品制作と展示を試みたものだ。従来の美術館や画廊主導型のアーティスト・イン・レジデンス展とは異なり、作家サイドにより大きな自由が与えられており、作家どうしのコミュニケーションも日を追って密なものになってきたという。

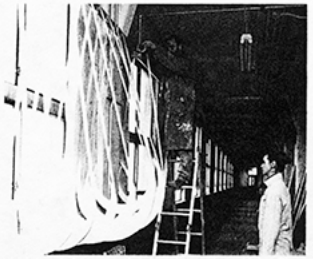
日本側のまとめ役は数年来『大谷地下美術』展を企画してきたギャラリー・サージのディレクター、酒井倡一氏。今回の出品作家も大谷の石切り場を舞台にしてきた作家が中心だ。「日本の作家は段取りよくやっています。ベルギー側は材料にしてもあれがほしい、その日のうちに別のものがほしいと、サポートしている日本人作家をてこずらせている人もいますが、まあ、そんなやりとりがおもしろいといえばおもしろいですね。」と酒井氏。個性がぶつかりあう中から何が生まれるかを、じっと見守る余裕が感じられた。

ベルギー側は、作家であるテレーズ・ショットーさん（サン・リュック美術大学教授）を軸として、アーティストが集まった。緑色のつなぎを着たこの小柄な女性は、石膏を使ったつくりかけの作品を前に、気軽にインタビューに応じてくれた。

「私はベルギーのアーティストたちに、この空間の特異性を理解し、そこから、今まで自分が守ってきた手法＝スタイルを見直してみたら、と呼びかけました。それが可能だったのは、いきなり日本に来て制作するのではなく、その前に日本側の作家と徐々にコンタクトをとっていたからです。私が日本を訪れたり、川嶋敦子さんがビデオを持ってブリュッセルに来てくれたり、作家がそれぞれパートナーをみつけて、文通などを通じて、こんな材料が手に入るだろうか、といった情報交換したり……。私たちは、こうした交流の結果に満足しています。なぜって自分の制作だけでなく、他の人の、それも異なった文化に属する人々の制作にもかかわることができたのですから。そうすることで自分の文化もまた、以前よりはっきり見えてきましたし……。」

ショットーさんの作品は、縦に細長い石と、人体を石膏で表わした二つの部分から成る。「人型のほうは西洋を、石は東洋を象徴していて、これらが向きあう姿は、私にとって『門』のイメージをもっています。西洋では昔から、世界の人間――特に女神ですが――で表わしてきたけれども、日本ではちょっと違うみたい。石や岩もそれ自体が瞑想にふけっているようで。いろいろな状況下に置かれた石を見ましたが、それらは限りなく私に刺激を与えてくれます。」と、東西の文化が接触しあうことの意義をそのまま形にしたような作品を説明してくれた。

興味深かったのは、旧金竜小学校の空間をもっと普遍的な性格をもったものととらえ、その中で従来の手法による作品を展開させたミッシェル・ムーフさん。21個の小型のカンヴァス上に赤やオレンジで絵



モニカ＆ベルナール・ユボのインスタレーション。校舎2階の廊下に、ビニールテープでつるした三日月形の石膏と竹を設置した。竹は近所で調達したもの。

幾何学的な形態に興味があるという、イヴリーヌ・デュブックさん。首に掛けた枠は赤と白だが、「これが私にとっての日本の色」とのこと。

陽気なジュアン・ドゥルトレモンさん。軽快なフランス語で訪問者をエンタテインする。

今回の出品作家の中で最も若手のカトリーヌ・ワルモーさん。古本市で買った和綴じの本（理科の教科書）から発想を得て作品をつくった。

会場となった浅草の旧金竜小学校。木造の床がきしむ、昭和初期の建物だ。

日本展　1991年4月7～20日
浅草旧金竜小学校校舎
ベルギー展　1991年11月4日～27日
ブリュッセル、サンカントネール公園
参加作家　日本側）有吉徹&直子、伊東直昭、伊東七男、川嶋敦子　土屋様、出口道吉、平川典俊、松枝秀晴、水留周二、八百板力、山本伸樹、（ベルギー側）テレーズ・ショットー、ジュアン・ドゥルトレモン、イヴリーヌ・デュブック　モニカ&ベルナール・ユボ、ミッシェル・ムーフ　ヴェルル・ビンケール、スルー、クリスティーヌ・ウィルメス、ベルナール・ヴィレール、カトリーヌ・ワルモー
主催　国際現代美術交流展委員会、朝日新聞社
後援　国際交流基金、ベルギー大使館ほか
協賛　松下電器、トヨタ自動車、全日本空輸ほか

を描き、それらをつるすのだが、「欠けている」部分を含めて28個のカンヴァスが、1つのあいまいな空間関係をつくり出すのだという。「ぼくは「浅い深さ」に常々興味を抱いてきた。マンテーニャの絵の中に、背景が前面に押し出されてくるような、逆遠近法を使って描いた作品があるが、ぼくの絵も、そういった問題を含んでいる。平面の中に最小限の彫刻的要素をつくり出そうとしている。絵画はもはや死んだという評論家もいるが、ぼくはそうは思わない。ルネッサンスの画家やマレーヴィッチ、モンドリアンといった作家がとりあげた問題は、今日でもまったく新鮮なものだからだ。」という。西洋絵画史の延長線上に自分を位置づける態度は明快だ。

一方、若手作家の中には、日本での発見を自分の作風に直結させた人もいた。カトリーヌ・ワルモーさんがそうである。ワルモーさんは、市場で買い集めた写真や紙に加え、「この本との出会いが大きかった」と、和綴じの古びた理科の教科書を見せてくれた。「この本に出ている幾何学的な図形を見たとき、これだと思いました。これは、日本の紙に書かれた遠いものであるにもかかわらず、私にも理解できた。いや、むしろ私が見知っているものに非常に近かったのです。それで木の板の上に、私なりのやり方で、これらの図を再現しました。私は日本に来る前から、素材としての紙に興味をもって、ぜひ使いたいと思っていたのですが、紙が単なる支持体でなく、作品をつくるさまざまな動機を与えてくれることに気づき、とても驚きました。」と、滞在中に自分の制作の方向が部分的に変わったことを強調した。

アーティストによって、今回の経験の受けとめ方はさまざまだが、企画実現までの時間の熟成が伝わってくるような、温かい雰囲気が会場を包んでいた。今年10月にはブリュッセルのサンカントネール公園に舞台を移し、こんどは日本人作家が異文化に接しながら、作品をつくることになる。

Photo : Imai Yasuo

テレーズ ショットーさんの石膏の作品。人型は西洋、細長い石は東洋を象徴し、対面する2つの形が「門」を表わすという。